


令和5年度

兵庫県公立高等学校学力検査問題

国語

注意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1ページから10ページまで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙の右上の欄に受検番号を書きなさい。
- 4 解答用紙の  の得点欄には、何も書いてはいけません。
- 5 答えは、全て解答用紙の指定された解答欄に書きなさい。
- 6 問題は五題で、10ページまであります。
- 7 「終了」の合図で、すぐ鉛筆を置きなさい。
- 8 解答用紙は、机の上に置いて、退室しなさい。

次の【会話文】は金子みすゞの詩についてグループで話し合っている場面である。【詩Ⅰ】・【詩Ⅱ】、【会話文】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【詩Ⅰ】

御本

さびしいときは、父さんのお留守の部屋で、本棚の御本の背の金文字を、ちつと眺めて立つてるの。

ときにや、こつそり背のびして、重たい御本をぬき出して、人形のやうに、抱っこして、明るいお縁へ出てゆくの。

なかは横文字ばかりなの、カナはひとつもないけれど、もやうみたいで、きれいなもの。それに、X。

お指なめなめ、つぎつぎに、しろい、頁をくりながら、そこにかかれたお書を、つぎからつぎへとこさへるの。

若葉のかげの文字にさす、Yのお縁で父さんの、大きな御本よむことが、私ほんとに好きなのよ。

【会話文】

生徒A 【詩Ⅰ】は、読書の楽しさを表現した詩ではないかな。ただ本を読むだけでなく、視覚や嗅覚など身体で本を感じているところもおもしろいね。語り手である「私」の、本が好きだという気持ちが強くとわって来る詩だね。

生徒B 「ほんとに好きなのよ」とあるように、語り手は本が好きなんだね。でも、この詩の語り手は、「①」のことを「もやうみたい」と言っているくらいだから、「読書」はしていないと思うよ。

生徒C そうか。「お書」を「こさへる」とあるので、「本を見て想像の世界を作り上げていく」という感じだね。

生徒D 私は【詩Ⅰ】を読んで、幼い頃一人で留守番をしたときの寂しさを思い出したよ。詩の冒頭に「さびしいときは」とあるように、寂しさを紛らわせるために、読めない本で遊んでいたんじゃないかな。

生徒B 【詩Ⅰ】では、「父さん」の「お留守の部屋で」、「父さん」の「大きな御本」とあるように、本なら何でもいいではなく、語り手にとって「父さん」の「部屋」で、「父さん」の「御本」を手に取ることに意味があったのかもしいね。

生徒A なるほど。「②」扱っているから、本を大切なものだと捉えていることがわかるけど、これも「父さん」の「御本」だからなんだね。本で寂しさを癒やしていたということか。

生徒C 「明るいお縁」とあるように、光が差し込む情景がよまれているということは、語り手は寂しさから解放されたんだよ。

生徒D そうかな。【詩Ⅱ】を示しながら「この詩を見てよ。これは、同じ作者の「独楽の実」という詩なんだ。時間かたつのを忘れて「独楽の実」に夢中になる様子からは、一人遊びの楽しさが伝わってくるけど、同時に寂しさを感じる詩でもあると思う。寂しいことばは一つもないのに語り手の寂しさが伝わってくるのが不思議だね。

生徒B きつと、「③」の繰り返しは何とも言えない寂しさを感じさせているんだね。

生徒C そうか、使われていることばが、そのままの意味を表しているとは限らないんだね。そう考えると、Bさんが指摘した繰り返し部分の、逆接表現であることも効果を生んでいるのかもしれないね。

生徒A つまり、【詩Ⅱ】からは、「独楽の実」に夢中になって遊ぶ楽しさの中に一人遊びの寂しさが、それと同じように、「詩Ⅰ」からは、本にふれる楽しさの中に「父さん」と遊べない寂しさが、それぞれ感じられるということだね。この二つの詩の共通点は「心の奥に隠された寂しさを表現している」ということだね。

生徒D なるほど。それともう一つ共通点があるよ。二つの詩は、ともに七音と五音のことばの繰り返しが印象的だよ。声に出して読んでみたらわかるけど、軽快なリズムで詩の世界にすんなり入っていきえると思うよ。

生徒C そうか。だから、金子みすゞさんの詩は童謡になっているものが多いんだね。

【詩Ⅱ】

独楽の実

赤くて小さい独楽の実よ
あまくて渋いこまの実よ。

お掌^ての上でこまの実を
ひとつ廻^{まは}しちやひとつ食べ
みんななくなりやまた探す。

Z、草山に

赤いその実はかず知れず
茨のかげにのぞいてて、

Z、草山で

独楽を廻せば日も闌ける。

問一 【詩Ⅰ】の空欄Yに入ることばとして適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 二月 イ 五月 ウ 九月 エ 十二月

問二 【詩Ⅰ】・【詩Ⅱ】それぞれの特徴として適切なものを、次のア～オから一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

ア 興味の対象を指すことばを最初の部分で反復し、読者にその対象を印象づける。

イ 詩の後半で対句を効果的に用いて、語り手の心情の高まりを読者に印象づける。

ウ 詩の前半部分に隠喩を用いることで、読者に豊かなイメージを思い描かせる。

エ 語調をやわらげる終助詞を全ての連で用いて、やさしい響きを読者に感じさせる。

オ 連ごとに視点を切り替えることで、読者に奥行きのある情景を思い描かせる。

問三 【会話文】の空欄①、②に入ることばを、それぞれ【詩Ⅰ】から抜き出して書きなさい。ただし、①は二字、②は六字のことばとする。

問四 【会話文】の最初の生徒Aの発言を踏まえると、【詩Ⅰ】の空欄Xにはどのようなことばが入るか。そのことばとして適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア すべすべしてゐるの イ お歌がきこえるの ウ ふしぎな香がするの エ とつてもかはいいの

問五 【詩Ⅱ】の空欄Zと【会話文】の空欄③にはいずれも同じことばが入る。そのことばとして適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア さびしいけれど イ ひとりぼっちで ウ さびしくなんかないから エ ひとりだけけれど

問六 【会話文】の内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 生徒Aは、【詩Ⅰ】について、読書を含め本にふれる楽しさを表現した詩であると捉えていたが、生徒Bの意見を聞いて、元の解釈を修正し、最初の発言を撤回した。

イ 【詩Ⅰ】についての生徒Bの発言が、生徒Cや生徒Aに気づきをもたらし、その後の話し合いを通じてグループの【詩Ⅰ】に対する理解が一層深まることとなった。

ウ 生徒Dが、【詩Ⅱ】の語り手は一人遊びで寂しさを紛らわせている、という解釈を示したことにより、生徒Bと生徒Cは【詩Ⅱ】の新しい解釈の可能性に気づいた。

エ 【詩Ⅱ】の表現効果に生徒Cが気づいたことをきっかけに、生徒Dが二つの詩に共通するリズムの特徴に言及したことで、詩を音読する楽しさが話題の中心となった。

二 次の書き下し文と漢文を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔書き下し文〕

郢人(手紙を)に燕の相国に書を遺る者有り。(その人は夜に手紙を書いていて)夜書して、火明らか

ならず。因りて燭を持つ者に謂ひて曰はく、「燭を挙げ

よ。」と云ふ。而して過つて燭を挙げよと書く。燭を挙げ

よとは書の意に非ざるなり。燕の相、書を受けて之を説き

て曰はく、「燭を挙げよとは、明を尚くするなり、明を尚くせ

よとは、賢を挙げて之に任ずるなり。」と。燕の相、王に白

す。大いに説び、国以て治まる。

〔漢文〕

郢人ニ有遺ル燕相国書者。夜書。火不

明。因謂持燭者曰、「挙燭。」云。而過書

挙燭。挙燭非書意也。燕相、受書而

説之曰、「挙燭者、尚明也、尚明也者、

挙賢而任之。」燕相、白王。大説、国以

治。

〔注〕 郢——古代中国の楚の国の都。 燕——古代中国の国の名。

相国・相——総理大臣にあたる重臣。

問一 傍線部②の「白」と同じ意味の「白」を用いた熟語を、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 敬白 イ 白紙 ウ 白昼 エ 空白

問二 書き下し文の読み方になるように、傍線部①に返り点をつけなさい。

問三 二重傍線部 a・b の主語として適切なものを、次のア～エからそれぞれ一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 書を遺る者 イ 燕の相国 ウ 燭を持つ者 エ 燕の王

問四 本文の内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 郢人は、わざと誤った内容の手紙を送って燕国を混乱させようとしたが、燕の相国がその意図を見破り、国を危機から救った。

イ 燕の相国は、手紙の記述が誤りだと気づかず、文字通りに実行するよう燕王に進言してしまったが、偶然にも国は治まった。

ウ 燕の相国は、手紙の中に間違つて書き込まれた記述を深読みしたにすぎないが、結果的に国の安定をもたらすこととなった。

エ 郢人は、燕王に送る手紙の重要な言葉を書き間違えたが、燕の相国の機転により、国を治める心構えが燕王に正しく伝わった。

〔韓非「韓非子」〕

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

太閤秀吉の連歌の席にて、ふとその付合にてこそあるべけれ、「奥山に

紅葉ふみわけ鳴く螢」とせられしを、紹巴が、「螢の鳴くといふ証歌はいざ

しらず。」と申し上げしに、大いに不興にてありしが、「なんでふ、おれが

鳴かすに鳴かぬものは天が下にあるまじ。」と広言せられしを、細川幽

斎、その席にゐて、紹巴に向かひて、「いさとよ、螢の鳴くとよみ合はせた

る証歌あり、『武蔵野の篠を束ねてふる雨に螢ならでは鳴く虫もなし。』と

③ 申されしかば、紹巴は大いに驚きて平伏し、太閤は大機嫌にてありし由。

翌日、紹巴すなはち幽斎へ行きて、「さるにても昨日は不調法にて、家の面

目を失ひし。何の集の歌なりや。」とうかがふ。幽斎、「あれほどの人に何

の証歌どころぞや、昨日の歌は、我らが自歌なり。」と申されし由なり。

(注) 付合——連歌で長句(五七五)・短句(七七)を付け合わせること。

紹巴——安土桃山時代の連歌師。

証歌——根拠として引用する和歌。

細川幽斎——安土桃山時代の武将・歌人。

武蔵野——今の東京都と埼玉県にわたる地域。歌によく詠まれた。

問一 二重傍線部を現代仮名遣いに改めて、全て平仮名で書きなさい。

問二 傍線部①の意味として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 関心がない様子で イ 悲しげな様子で
ウ 面白くない様子で エ 悔しそうな様子で

問三 傍線部②・③の主語として適切なものを、次のア～オからそれぞれ一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 筆者 イ 秀吉 ウ 螢 エ 紹巴 オ 幽斎

問四 傍線部④の意味として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 秀吉のような連歌に未熟な人を相手に、証歌のささいな誤りをこ

とさらに指摘するものではない。
イ 秀吉のような教養ある人物に、証歌を明らかにすることの意義を

説くなど無礼な振る舞いである。
ウ 秀吉のように気が短い人には、遠回しな言い方をするのではなく

証歌をはっきりと示した方がよい。
エ 秀吉のように権勢を誇示する人に対して、証歌の問題を取り上げて

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

芸能プロダクションのマネージャーである樋口桐絵は、十六歳の篠塚未散(ミチル)の才能を見いだし、博多から上京させる。ミチルは、デビューが決まっている十四歳の有川真由を指導する作曲家の高尾良晃から歌唱レッスンを受けるようになった。ある日、音楽番組の収録を見学しに来ていた真由とミチルの二人は、到着が遅れている人気歌手ピンキーガールズの代役として、リハーサルで歌うことになった。

マイクが二本、真由とミチルのそれぞれに手渡される。

プロデューサーがオケのほうをふり向いた。

「じゃあ、高尾先生！ お願いしますよ」

先ほどから、真由とミチルを眺めながらずっとにこにこしていた高尾が、二人に向かって人差し指を振った。

「きみたち、並び順はそれでいいのかな」

え、と二人がまた顔を見合わせる。

「逆のほうがいいと思うよ」

真由とミチルが、きよんとした顔で、言われたとおり入れ替わる。

「よし、始めよう」高尾はおごそかに言った。「うまく歌おうなんて思わなくていいからね。ただ、できるだけ振りもつけて思いっきり歌ってくれと、僕らもカメラさんも、みんなが助かる。頼んだよ」

オケのほうへ向き直った高尾が、スツとタクトを振り上げる。振り下ろすと同時に、耳に馴染んだヒット曲のイントロが流れだした。

マイクを握った二人ともが、緊張の面持ちで、けれど少しはにかみながら踊り出す。

桐絵は、目を睜った。まるでこの日のために練習してきたかのようだ。

ステップも、手の動きも、振り付けを忠実になぞっている。

さらには歌いだしたとたん、周囲からどよめきと歓声が上がった。上のパートが真由、下がミチル、迷いもなく二声に分かれている。完璧なハーモニーと言っている。

ピンキーガールズの二人のうち、観客席から見ても左がユウ、右がマイ。マイのほうが低いパートを歌う。この並び順でなければ、真由もミチルも、こうまで迷いもなく自分の声に合ったパートを歌うことはできなかったはずだ。桐絵は舌を巻いた。高尾がわざわざ立ち位置を入れ替わらせたのはこのためか。

互いにタイミングをはかろうと、二人ともマイク越しに何度も目と目を見交わす。周りの歓声が届くたび、緊張がほぐれて笑みがこぼれ出す。

サビまで含めてワンコーラスが終わり、どちらも名残惜しそうにマイクを持つ手を下ろしかけたのに、なんと、オケはそのまま続けて間奏を奏で始めた。おおー、と拍手が沸く中、高尾がニヤリとこちらをふり返り、戸惑う二人に向かって顎をしゃくってよこす。

はっきりと視線を交わし合った真由とミチルが、笑い崩れながら二番を歌い始めた。

信じがたい光景を、桐絵は息を呑んで見つめていた。まさかあの二人が——犬と猿とまで言われた真由とミチルが、ともに笑顔で歌って踊る場面がめぐってこようとは。

こんな奇跡のような出来事はもう二度と起こらない。後にも先にもこれっきりだ。間が悪いというのか何というのか、どうしてこういう時に限って峰岸はいないのか。あの尊大な男がこれを見たらどれほどびっくりしたことか、口をぽかんと開けてステージを見上げる横顔までありありと思いつかなくて、桐絵は、実際にそれを見られなかったことが悔しくてたまらなかった。

とうとう二番のサビまで完璧に歌い終えた少女達が、演奏終了に合わせたりとポーズを決めたとたん、周りから今日一番の拍手が湧き起こった。はにかみながら四方へお辞儀をする二人に、すごいすごい、良かったよ、とねぎらいの声も飛ぶ。

「ニクいなえ、高尾先生。フルコーラスのサービスとはこれまた」プロデューサーが苦笑いしながらオケをふり向く。

「だって、きみたちも見たかったろう？ 途中で止めたりしたらきっと大ブーイングだ」

指揮棒を手にした高尾が身体を揺らして笑った。

「二人とも、ご苦労さんだったね。素晴らしいパフォーマンスだった」

上気した頬の二人がそれぞれに強く頷いて、頭を下げる。

「ありがとうございます！」

「はい、お疲れさん」

もう下がっていいよ、とプロデューサーに言われて舞台袖の階段を下りてくる真由とミチルを、桐絵は両腕を大きく広げて迎えた。

「素晴らしかったわよ、あなたたち！」

「ほんと？」とミチル。

「もちろんよ。二人とも、最高に光り輝いてた。見てて涙が出ちゃった」

「何それ、親戚のオバサンじゃあるまいし」

さっそく憎まれ口を叩く真由も、そのじつ、晴れがましさを隠しきれずに小鼻がびくびくしている。

同じ代役でも、他の歌手の代わりでは決してこうはいかなかった。二人

ともが のピンキーガールズ・ファンだからこそ、歌のパートも振り付けも完璧に覚えていて、皆の前で堂々と披露することができたのだ。

「あなたたちこそ、どうだった？」二人を見比べながら、桐絵は訊いた。

「スポットライトを浴びてみた感想は？」

「楽しかった！」と真由。

「もう、最高！」とミチル。

満面の笑みのまま隣に立つ相手を見やったかと思うと、慌てたように表情を引っこめて、ぶいっと顔を背ける。

ふだんでも、^⑩ せめてこれくらい距離感でいてくれたらいいのに、と桐絵は思った。

(村山由佳「星屑」)

(注) オケ——オーケストラの略。ここではテレビの音楽番組における伴奏の演奏者のこと。

峰岸——桐絵の上司。

問一 傍線部④・⑦・⑩の漢字の読み方を平仮名で書きなさい。

問二 傍線部①く③について、五段活用動詞の連用形が「た」「て」などに続くとき、活用語尾が「い」「っ」「ん」のように変化することを何というか。適切なことばを漢字二字で書きなさい。

問三 傍線部⑧の本文中の意味として最も適切なものを、次のアくエから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 驚いて イ 緊張して

ウ 落ち着いて エ うろたえて

問四 本文中の空欄に入る適切なことばを、次のアくエから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 引く手あまた イ 付け焼き刃

ウ 筋金入り エ 札付き

問五 傍線部⑤・⑨における真由とミチルの心情の変化の説明として最も

適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア はじめは、自信のなさを隠すことばかりに気をとられていたが、予想以上にうまく歌えたことで、歌う前の自分を恥じるとともに、より大きな舞台に立ちたいという思いがふくらんでいる。

イ はじめは、ステージに立つ心の高ぶりで余裕がなかったが、周囲の人たちの温かい声援を意識したとき、その心配りに感謝の気持ちを抱くとともに、それに気づかずにはいた自分を恥じている。

ウ はじめは、気の合わない相手と同じステージに立つことに気まぐさを感じていたが、歌い終わるころには、きこちなさを残しながらも、二人で力を合わせて歌うことに手応えを感じている。

エ はじめは、代役とはいえ本番さながらのステージで歌い踊ることに対する遠慮があったが、周囲からの賞賛の中で歌い終えたとき、想像以上の充実感を得るとともに照れくささを感じている。

問六 傍線部⑥の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア さりげない声かけによって真由とミチルの実力を十分に引き出した、高尾の音楽家としての力量に感嘆している。

イ 高尾の意図を理解して、それぞれ自分に合ったパートで歌い始めた真由とミチルの対応力に感心している。

ウ 瞬時に真由とミチルの声域の特性を見抜いた高尾の直感の鋭さに、信じられないという思いを抱いている。

エ 高尾の助言があったとはいえ、おごりかな雰囲気の中で実力を発揮する真由とミチルのことを見直している。

問七 傍線部⑩からうかがえる、リハーサルでの真由とミチルの様子を見ていたときの桐絵の心情の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 真由とミチルの実力はよくわかっていたとはいえ、突然実現した大舞台で予想をはるかに上回るパフォーマンスを見せる二人の姿に、二人組歌手としての今後の活躍を想像し、目頭が熱くなっている。

イ 真由とミチルの奇跡的なパフォーマンスを多くの関係者に見せ、二人組歌手としての実力を認めさせたことで、二人を売り込むために積み重ねてきた努力を思い出し、感情がこみ上げてきている。

ウ 真由とミチルがステージ上で存分に実力を発揮する姿をまのあたりにして、二人が葛藤を抱えながらもこの日のために練習してきたことを察し、二人のけなげな努力に思いをはせて感極まっている。

エ 真由とミチルが多くの人を沸かせていることを誇らしく思うとともに、決して交わることがなかったこれまでの二人を知るだけに、心の底から歌うことを楽しむ二人の姿に胸が熱くなっている。

問八 傍線部⑫の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア どれほど仲良くなったとしても、ライバルであることを忘れず、互いに対抗心を持ち続ける関係。

イ 心から打ち解けることがなくても、互いの実力を認め合い、必要ときには協力を惜しまない関係。

ウ 実際は反目していても、人前に出る者として表向きは仲が良さそうに振る舞うことができる関係。

エ 厳しい世界を生き抜いていく仲間として、隠しごとをせず本音を言い合うことができる関係。

五 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

メディアは圧倒的な政治的影響力をもっている。二〇世紀以降の政治的リーダーたちは、どのような政治体制であれそのことを強く意識し、政権の維持・強化や政策の実現のためにメディアを掌握しようとしてきた。メディアは、政治成果を強調し、国民意識を強め、政敵を抑圧・攻撃するために、実際、圧倒的な影響力をもっている。

メディアと政治というテーマをかかげるとき、すぐに頭に浮かぶのは、メディアがかかわる特定の政治的メッセージや政治的立場だろう。ある政治体制や政策などに対する支持であれ批判であれ、メディアの発信する内容そのものがそこでは問題となる。メディアというものが、その字^Aぎ通り、メッセージのなかたちとなるのだとすれば、重要なのはメッセージの中味であって、そのメッセージを伝えるメディアそのものが何であるかは、その場合、副次的な意味しかもたない。

マーシャル・マクルーハンのよく知られた言葉に、「The medium is the message.」^(註)というものがある。メディアこそがメッセージである、というこの表現は、メッセージとなっているのはメディアの伝える内容であるという一般的なイメージを^Bネン頭に置いたものであり、マクルーハンはそれを挑発的に否定した言い方をあえてしていることになる。ふつうはメディアの伝達内容こそがメッセージだと思われている。しかし、マクルーハンは、むしろ内容を伝達する媒体そのものがメッセージなのだ^(註)と主張しているのである。

^②これはずいぶん突飛な主張のようにもみえる。例えば、明日は晴れるという単純な情報を伝えてもらうとき、その情報の内容そのものが重要なのである。直接会った人からそれを口頭で教えてもらうか、新聞に書いてある情報を読むか、テレビで知るか、あるいはスマホでSNSのやりとりをしているときに知るかというメディアのちがいは、どうでもよいことかもしれない。しかし、メディアのちがいはもっと根本的な変化を人間の

うちに生み出してゆく。直接に人と顔を合わせて話をする、新聞を通じてメッセージを受け取る^Cこと、テレビを見ること、SNSを通じてさまざまな人と高度な技術をカイしてつながることは、それぞれまったく異なる人間の関係のあり方をもたらす。異なる時間感覚、異なる社会のあり方がそれらのメディアによって生み出されるのである。

マクルーハンにとって、歴史の過程の中で西欧近代社会というものを作り出してきた、その最もおおもとの思考の枠組みは、活版印刷という技術によって生み出されてきた。活版印刷によって大量に普及することが可能になった「書物」というメディアが、西欧近代の政治・経済・社会・文化のあらゆる領域の土台になっている。その意味では、書物に書かれている内容よりも、「書物」というメディアそのものが西欧近代の政治・経済・社会・文化を表すものになっているということだ。同じように、「テレビ」というメディアは、それまでの書物世界の価値や思考様式を根本的に塗り替え、それまでとは異なる^③社会を作り出すことになった。そして「コンピュータ」やそのうえで機能する「インターネット」、またその延長線上にあるスマートフォンによるコミュニケーションは、さらに徹底的に世界の枠組みと人々の思考のあり方、生活のあり方を作りかえている^④。このような世界の根本的な変革を推し進めてきたのは、メディアによって伝達される情報よりも、むしろメディアそのものである。

もう一度、メディアと政治というテーマに焦点を移そう。メディアが発信する政治的メッセージはもちろん政治的にきわめて大きな力をもっている。しかし、それとともに、あるいはそれ以上に^⑤、そこで用いられているメディアは何かということが、政治的に決定的な意味をもつ。伝達の宛先となる人の数、速さ、イメージを喚起する力は、技術性がたかまるにつれて、圧倒的に増大する。ここでは技術的な複製のもつ二つの異なる意味のうち、同じものを大量に早く生み出すということがとりわけ重要になるが、それとともに、受け手に対してイメージを喚起する力についていえば、正確なオリジナルのコピーを生み出すという機能も無関係ではない。

また、コミュニケーションの形態も、メディアの技術性によってかなりの程度条件づけられている。新聞やテレビが、少数の力を持つ者から多数の人間への一方向的な伝達形式をもつのに対して、ウェブ上では多数者が双方向的につながっているだけでなく、誰もが発信者となりうる構造が生まれている。それ以前のメディアを特徴づけていた、発信者となるためのある種の資格が、そこには存在しない。現代では、政治家たちに対して発言するのは、政治的・経済的な有力者や知識人だけでなく、場合によっては、政治的な定見を必ずしも持たない圧倒的多数のウェブ上の声のほうがか、はるかに大きな影響力をもちうる。そしてまた、そのことを意識して政治が進められてゆく。新聞の時代の政治、映画の時代の政治、テレビの時代の政治、そしてインターネットの時代の政治は、すべてそれぞれ異なるメディアの特質によって、異なるものに作り上げられてきた。「メディアアこそがメッセージである」という言葉は、ここでも完全にあてはまる。

(注) マーシャル・マクルーハン——カナダ出身の英文学者・文明評論家。
medium——“media”と同じ意味。“media”は、“medium”の複数形。
(山口裕之『現代メディア哲学』)

問一 二重傍線部A～Cの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のA～

- エからそれぞれ一つ選んで、その符号を書きなさい。
- A ア 地球ギを使って学ぶ。 イ 審ギを行う。
- ウ 自己ギ性の精神。 エ ギ理と人情。
- B ア 馬の耳にネン仏。 イ 天ネン資源が豊富だ。
- ウ ネン俸制を導入する。 エ 費用をネン出する。
- C ア 一堂にカイする。 イ 一カイの市民にすぎない。
- ウ 暗号をカイ読する。 エ 体力の限カイ。

問二 傍線部④はどの文節に係るか。一文節で抜き出して書きなさい。

問三 傍線部①を説明した次の文の空欄に入る適切なことばを、本文中から七字で抜き出して書きなさい。

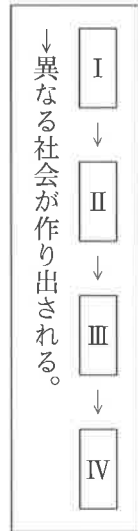
□□□□ に関する議論の場。

問四 傍線部②の理由を説明した次の文の空欄 a・b に入る適切なことばを、それぞれ本文中から抜き出して書きなさい。ただし、a は四字、b は八字のことばとする。

伝達において、伝達される内容は □ a 役割を果たすにすぎない、というマクルーハンの考えは、伝達に対する □ b からあまりにもかけ離れているから。

問五 傍線部③が作り出される過程を、次の【図】のように整理した。

【図】の空欄 I～IV に入ることはの組み合わせとして適切なものを、あとのア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。



- | | | |
|---|------------------|-----------------|
| ア | I 技術の革新 | II 新たなメディアの出現 |
| | III コミュニケーションの変化 | IV 思考の枠組みの転換 |
| イ | I 思考の枠組みの転換 | II コミュニケーションの変化 |
| | III 技術の革新 | IV 新たなメディアの出現 |
| ウ | I 技術の革新 | II 新たなメディアの出現 |
| | III 思考の枠組みの転換 | IV コミュニケーションの変化 |
| エ | I 思考の枠組みの転換 | II 技術の革新 |
| | III 新たなメディアの出現 | IV コミュニケーションの変化 |

問六 傍線部⑤の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア

技術性の高いメディアを用いれば、人々はオリジナルのメッセージに触れることで政策を深く理解することができるため、政治に関して自分の意見を持つ人が飛躍的に増えるということ。

イ

技術性の高いメディアを用いることにより、短期間に多くの人の意見を集めることができるため、多様な考えを反映させた、極めて実現性の高い政策の立案が可能になるということ。

ウ

技術性の高いメディアを用いれば、多くの人に迫真性のある情報を一斉に伝えることができるので、訴える政策が同じ内容であっても、賛同を得る可能性が飛躍的に高まるということ。

エ

技術性の高いメディアを用いることにより、政策の内容そのものの説得力を高めることができるので、政敵が批判を大量に拡散したとしてもその影響が極めて小さくなるということ。

問七 傍線部⑥の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア

インターネットの技術により、それまで政治的な発言をすることがなかった人々が匿名で意見を述べるようになり、政治家は何の資格も持たない一般人の意見を最重要視するようになった。

イ

インターネットの技術が人々に広く意見表明の場をもたらした、政治に関する専門的な知識や明確な考えを持つともいえない人々の意見が、政治家の判断を左右する事態が生じるようになった。

ウ

インターネットの技術によって、誰もが発信者となり得る社会が実現し、人々は、発言者が誰であるかに関係なく、政治的な主張の妥当性を発言の内容の正しさによって評価するようになった。

エ

インターネットの技術は、誰もが発信者となることができる伝達の構造を生み出し、政治的な意見を持つことがなかった人々が、知識人たちの代わりに政治家に対して発言するようになった。

問八 本文に述べられている内容として適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア

メディアが伝える政治的なメッセージは、それを伝える媒体が何であれ、メッセージを受け取る人々に対して同等の影響力を持つが、このことは、メディアによる伝達全般に当てはまる。

イ

一方向的な伝達形式を特徴とするメディアは複数あるが、発信者と受信者の関係のあり方が似たようなものとなるため、メッセージを伝えることによる社会への影響力はどれも大差ない。

ウ

情報が単純か複雑か、また政治的な場面であるかどうかを問わず、メディアによる伝達においては、多くの場合、メッセージの内容そのものよりも、伝達の形態が影響力を持つことになる。

エ

同時かつ双方向的に情報をやりとりする高度な伝達に限れば、情報を発信する行為そのものが人々の考えの形成に影響するため、メディア自体がメッセージの意味合いを持つと言える。